

市民のために

M大学：経済学部・経済学科・2年

期間：平成30年8月20～24日（5日間）

私は、地元である長門市が大好きです。その思いは、大学進学を機に地元を離れてから更に大きくなりました。長門市の魅力はたくさんありますが、何より一番の魅力は人の温かさだと思います。住んでいた頃は特に感じなかったのですが、地元を離れて初めて長門市っていいところだな、温かいな、と気づかされました。それで、大学卒業後は長門市に帰ってきて、長門市のためになる仕事をしたいと考えるようになりました。そして今回、夏休みを利用してNのインターンシップに参加させていただきました。

インターンシップに行くまでの私の市役所のイメージは、「ザ・デスクワーク」でした。しかし、この5日間でそのイメージが覆りました。一口に市役所で働く、といっても多くの部署があって、その部署によって全く違った仕事をしているのだということ、デスクワークはもちろんですが市民の皆さんと直接お話をすることや、外に出た活動もあるのだということを知りました。

5日間のインターンシップでは、本当に様々な業務に携わらせていただきました。デイサービスにお邪魔して利用者の方々と接したり、予算や監査、選挙について教えていただいたり、俵山ラグビー場の施設やセンザキッチンの見学、さらに美祢線の利用促進についての話し合いをしたりしました。

様々な経験をさせていただいた中で、特に私が印象に残ったことは2つあります。1つは、地域おこし協力隊の方のお話を聞き、実際に活動している現場を見させていただいたことです。その方はジビエ肉を専門としてハンターをされている方で、自分がジビエ活動をすることが少しでも長門市の役に立てばいいとおっしゃっていました。市役所の方が一生懸命市のために奮闘するのは当然のことかもしれませんが、市民の方がそれに受け身にならずに自ら行動しておられることに驚き、素晴らしいと思いました。市民と市役所職員の双方が協力して、より良い街づくりができるのだと学ぶことができました。

もう1つは、山陽小野田市と美祢市との三市合同で美祢線の利用促進の話し合いをしたことです。周りの観光スポットをピックアップしてそこに目を向けさせることはできるのですが、その交通手段に美祢線を使ってもらうのは容易ではなく、様々な案を出し合いました。大学のゼミ活動で同級生とディスカッションはしたことがありますが、大人の方々と話したことがなかったですし、また違った視点からの意見も聞けたので、知識が増えたのと同時に自分の視野を広げることができました。

この5日間を通して、さらに長門市役所で働きたいと思うようになりました。試験まであと2年ほどですが、それまで多くの経験と学力を身に付け、一皮も二皮も向けて長門市に帰ってきます。頑張ります。

これからの自分に必要なこと

N大学大学院：生活工学共同専攻・1年

期間：平成29年8月21日～25日（5日間）

わたしは、ゼミの活動で古民家の再生や、地域に入り調査研究を行なっていました。現在技術の進歩により都市開発が進み、町の「地域らしさ」が希薄しているように思います。古民家のような歴史的な建造物等の資源は、その地域の風土に合わせた生活から建築されたものであり、「地域らしさ」を伺える重要なものだと思います。そのような歴史的資源をうまく生かしたまちづくりに関わる仕事がしたいと、活動を通じて思うようになりました。実際、調査研究を行う際に市役所の方と関わる機会がありましたが、どのような仕事をしているのか疑問でした。そこで今回、歴史的資源を生かしたまちづくりが行われている萩市のインターンシップを希望しました。

インターンシップの最初の3日間は、フィールドワークを通して萩のまちを教えていただくことから始まり、歴史的な建造物を活用したアート盆栽教室の見学、ジオパーク活動の見学、萩の地域らしさを作り出すおたからをめぐる「おたからマップ」を作成するために地区ごとで行われる協議に参加させていただきました。最後の2日間は萩市江向地区のまちあるきのプランを実際に自分で作成し発表を行い、フィードバックしていただきました。

インターンシップを通して、まず、まちづくりには様々な人が関わっていることを知りました。市役所の職員の方だけでなく、NPO団体の方や、地区ごとの保存会の方、学芸員の方など、様々な立場の人が関わって事業が進められていることを知り、とても驚きました。他の仕事でも人とコミュニケーションをとることはとても重要だと思いますが、様々な立場の人と関わるまちづくりの現場ではさらに重要であると感じました。インターンシップ中も様々な方と話す機会がありましたが初対面で緊張してうまく話すことができない場面や、受け身なため自分からあまり話すことができない場面、自分のコミュニケーション能力の低さを痛感しました。初対面の人と話す機会があれば積極的に話をするように心がけたいと思います。最後2日間のまちあるきプラン作成では、文献を読み、実際にまちにでて散策しながらプランを作成し、それを推進課の方やNPOの方に発表して、ご意見をいただきました。まちあるきのプランを作成しながら、そのまちのことを知ることと同時に、そこに住む人たちは何を観光客に紹介したいか、何を知ってもらいたいか、ということも大事だということに気づきました。私の発表に対して、プランを考える上では物語をもって行う必要があることや、観光客目線で考える必要があることをご指摘いただきました。まちあるきプランの作成では、そこに住む人たちの目線と観光客目線の両方が必要であると思いました。これはまちあるきプランに限らずこれから先、就職した際に持っておきたい視点だと思います。

5日間という短い間でしたが、実際にインターンシップを体験しなければ経験できないこと様々なことを得ることができ、勉強になりました。実際に一週間まちじゅう博物館推進課でお世話になり、人との関わりや、市民と観光客双方の立場に立って考えることの重要性を強く感じました。そのためには視野は広く持ち、違う分野、違う考え方ともっと積極的に関わる必要があると思いました。お忙しい中、関わっていただいたすべての皆さん、5日間本当にありがとうございました。

教育行政の仕事内容を知って

KS大学：文学部・3年

期間：平成28年9月12日～16日（5日間）

地元の山口県で教育に携わる仕事がしたいと思い、山口県庁教育庁で5日間のインターンシップをさせていただいた。最初の2日間は教育政策課、残りの3日間は学校安全・体育課で仕事内容について説明を受けたり様々な現場を訪問したりして、教育行政がどのような仕事であるのかを具体的に知ることができた。

中でも、教育企画班のNPOカタリバに委託した事業が印象に残った。新たな企画を作る仕事が公務員にもあるということが新鮮で、実際に高校で見た生徒の真剣な顔を見ると、とても良い企画だと思った。山口県内の大学生と連携を図っていく取り組みであり、将来の山口県内就職・定住にも繋がる可能性もあると思われる。また、教育企画班では、姉妹都市である慶尚南道との国際交流の事業も行っていると知り、非常に興味を持った。自分が大学で朝鮮史学を専攻し、韓国語や韓国の文化についても学んでいるため、そういった国際交流に貢献する仕事が魅力的だと思った。他にも、農業高校で学校事務の予算ややりがいについての話を聞いたり、特別支援学校で様々な配慮をされた施設を見たり校長先生から説明を受けたりしたことも学びが大きかった。学校事務も興味を持っていた職の一つだったので、そのような職を30年間もずっと続けておられる事務の先生から貴重な話を聞くことができてありがたかった。特別支援学校の校長先生は子どもたちの笑顔から学ばされることが多いとおっしゃっていて、現場で生徒と関わり合う教員という職業の魅力も改めて感じた。また、学校安全・体育課では、教員が20名、行政が6名で教員と行政が協力して一つ一つの教育行政を担っていることがわかり、教員でも教育行政に携われることが興味深いと思った。現在、私は中学社会・高校地歴公民の免許取得を目指しているのですが、教員の仕事の一つとして現場以外での仕事もあることを知ることで、教員の仕事についての視野が広がって良かったと思う。学校体育班では、地元である光市の母校を訪れる機会があったり、小学校の恩師の活躍されている姿を拝見したりして、山口県で働くことの魅力を強く感じた。地域や家庭との連携を図るコミュニティスクール等は、地域の結びつきが強い山口県だからこそ、推進していくことのできる特色ある取り組みだと思った。

私は、今回のインターンシップで、職員の方々や学校現場の教職員の方々の仕事を間近で見ることができ、県民の血税を使って教育政策を行う教育行政も、生徒に直接に大きな影響を与える教員も、重い責任があり、児童・生徒の笑顔・元気のために精一杯働いておられることを実感した。公務員であっても、時期や担当内容によって残業が多い部署もあり、忙しそうであったが、それでも仕事を続けるエネルギーになっているのが、県民のため、児童・生徒のために働こうという強い思いだと感じた。教育企画班の方が、公務員は災害などが起きたときに、いち早く駆けつけることができる仕事だとおっしゃっていて、人々の幸せのために働く魅力ある仕事だなと心から思った。将来教員になるか、教育行政に関わるかという具体的な夢はまだ模索中であるが、今回学んだことを参考にしながら自分の将来に真剣に向き合い、夢の実現に向かって努力していきたいと思う。そして、生まれ育った山口の地に何らかの形で貢献できる人へと成長していきたい。

警察官の「やりがい」とは

R大学大学院：法学研究科：M1

期間：平成27年8月17日～19日（3日間）

私は大学進学を機に県外へ出たものの、住み慣れた土地、聞きなれた方言が懐かしくなり、地元での就職を考えるようになりました。そこで今回、山口県のインターンシップに参加することに決めたのです。受け入れ先としては、県警察本部を希望しました。人の安全・安心を守る警察官という職業は、昔からの憧れであり、将来の進路として考えてはいるものの、私自身、日頃から体を動かしていないこともあり体力面での不安があったため、今回のインターンシップを通して、こんな自分でも大丈夫なのか確かめたいと思ったからです。

インターンシップは警察本部から始まり、警察署、総合交通センター、警察学校、機動隊といった場所を回りながら、その場で働いていらっしゃる警察官の方々から、どういった施設なのか、日頃はどんな仕事、訓練をしているのかといったお話を伺い、時には装備品を実際に身に着けたり、防犯意識を高めるための街頭での声掛けに参加させてもらうなど、様々なことを体験させていただきました。それらの中でも印象に残ったのは、警察官の方々のお話だったのですが、どの方のお話にも共通するものがありました。それは、災害現場での救助活動、犯人逮捕など、直接、救助者、被害者から感謝の言葉が聞ける、また、交通違反の取締りといった常に感謝されるわけではないけれども、警察官にしかできない安全の守り方があるなど、警察官という仕事の特性上、他の仕事と比べると「自分が県民を守っているんだ」という「やりがい」を、より感じるができる、というものでした。とくに女性警察官の方々は、女性の被害者に寄り添うなど、女性ということを活かして仕事をしていらっしゃいました。

もちろん、人の安全・安心を守っているのは警察官だけではなく、どんな仕事にも「やりがい」はあります。けれど、悲しい結末をもたらす犯罪、事故を解決する、もしくは未然に防ぐことによって、自分が生まれ育った大事な土地に生きる、大切な人々を守ることで「やりがい」を感じられる警察官という仕事は、私の目に、とても魅力的な仕事として映りました。

また、冒頭で述べた体力についてですが、やはり、警察学校での体育の授業の体験で、入校していらっしゃる方々についていくことが出来なかった点を考えると、自分は、体力不足だと思いました。しかし、今回のインターンシップで知ることができた「やりがい」のある、警察官になるためにも、来年の就職活動に向け、体力強化という目標を掲げながら頑張ろうと思います。

最後になりましたが、県警察本部の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。

図書館でのインターンシップ

本当にしたいこと・好きなことを仕事に

B大学：文学部・日本文学科・2年

期間：平成26年8月27日～31日（5日間）

私は地元にある市立図書館のインターンシップに参加させていただきました。なぜ図書館でのインターンシップを希望したのかというと、私は小さいころから本が好きだったこともあり、週に一回は図書館を利用していたからです。将来は図書館司書になりたいと思っており、大学では司書の資格を取るために勉強をしています。学校で学んでいることが、現場ではどのように活かされているのか、特に読み聞かせの様子を実際に自分の目で見てみたいと思っていました。図書館員という立場で図書館に携わってみたい、図書館で働くとは一体どのようなことなのかを実際に体験したいという思いから、今回、図書館でのインターンシップをさせていただきました。

インターンシップで体験させていただいたお仕事は、棚に並んでいる本をきれいな状態に整理する書架整理という作業や、利用者から返却された本を元あった棚に並べる配架という作業、利用者から返却された本のバーコードを読み込み、返却処理を施す作業や、貸出処理の作業、図書館に新しく入ってきた本に薄い透明なビニールのようなものを貼ってコーティングをする装備という作業、もう図書館での保存期間が過ぎた雑誌などに廃棄処理を施してリサイクルできる状態にする作業等、様々な作業をさせていただきました。体験してみたかった読み聞かせは、お休みで実施されませんでした。実際に体験することはできなかったのですが、どのように読み聞かせの本を選ぶのか、どんな様子なのか、積極的に質問をしたらよかったと思い、その部分だけは心残りです。

インターンシップでの仕事を通じて思ったことは、イメージしていた図書館の仕事とは違ったということです。図書館員は立ちっぱなしかと思えば、棚の上は手を上に伸ばして背伸びをしたり、下の方では身体を丸めてかがんだりして、書架整理や配架作業は大変動きます。本は一冊では軽くても、たくさん持つと重たくなり、運ぶのも楽ではありません。もちろん立ちっぱなしの作業や座りっぱなしの作業もあります。

また、利用者とのコミュニケーションをとる機会が想像以上に多く、驚きました。図書館は静かにしなければならない場所なので、図書館員も利用者も声を出しづらいだろうなと思っていましたが、用がないことでも利用者が控えめな声にして話しかけてくださるのは特に驚きました。レファレンスや図書館員に何かを尋ねるときだけでなく、コミュニケーションをとれることを嬉しく思いました。教科書や授業だけでは決してわからなかったことだと感じています。図書館員という仕事を想像することはできても、現実とやはり違っていました。実際に体験してみないとわからなかったことが多くあったので、今回体験できてよかったと心から感じました。

私は今まで将来の仕事についてぼんやりとしか考えていませんでした。図書館で働きたいと思っはいますが、職種や仕事の内容よりも、お給料や条件がよかったらそれでいいと思っていることさえありました。しかし、図書館でインターンシップをさせていただき、本当に自分のしたいことや好きなことを仕事にできるようにきちんと将来について考えていこうと思うようになりました。